

【諮問事項③】

「ライフスタイルの変化や高齢化などへの対応について」意見集約

1. 立ち番と集積所の管理について

課題（審議会の意見）○立ち番など自治会で行う集積所管理に関わることが難しい世帯がある

- ・高齢世帯や単身世帯、共働き世帯では、自治会が行うごみ集積所の管理や、不燃ごみの立ち番に参加することが難しいケースが増えている。
- ・自治会によっては、ごみ出し時間の短縮や立ち番の交代・免除により、こうした世帯に配慮しているケースもある。
- ・地域によっては、立ち番の負担を理由に、冬季は地域の集積所での不燃ごみ収集を中止している事例もある。

○地域活動の担い手が減少する中、負担軽減を検討する必要がある

- ・自治会長へのアンケートでは、「立ち番は自治会で実施すべきであるが、全体の60%で負担を感じている」との結果であった。
- ・自治会の年齢構成を考えると、近い将来に自治会活動の担い手が減少し、現在の活動内容を維持できなくなることが予想されることから、自治会の負担軽減として立ち番の廃止を検討してはどうか。
- ・立ち番をしたくない、したくてもできないという事情から自治会に入らない人も増えており、その結果排出困難者が増えている。
- ・不燃ごみの分別は定着し、地域によっては立ち番を実施しなくても秩序維持が可能な状況にあると思う。工夫をすれば必ずしも立ち番が必要な状況ではなくなっているのではないか。
- ・他市で実施しているように、ごみの種類によって出す曜日を変えれば、自治会の集積所管理負担が軽減できるのではないか。

○立ち番が果たしているその他の役割

- ・不燃ごみを集積所に持って行く時に、立ち番等の担当が高齢者のごみ出しを支援していることもある。
- ・長年交代で立ち番を実施してきたことによりごみの分別の理解を深め、市民のごみ分別が定着してきたという経過もある。地域活動の中でごみの分別や課題を学習し、これからの担い手を育成する取り組みも必要。

○可燃ごみ集積所の課題

- ・自治会では可燃ごみの集積所の管理も行っており、ごみ出しに関しては不燃ごみの立ち番だけではなく様々な負担を負っている。

2. 排出困難者への対応～戸別収集について～

課題（審議会の意見）

○公的サービスと地域力のバランス

- ・介護保険導入当初に介護保険制度の定着のためヘルパーを積極的に利用した結果、その反動で地域力や家族力が低下したという側面もあり、地域や家族に頼むならお金を払った方が良くと考える人が増えている。
- ・排出困難者対策として戸別収集を実施するということについては、戸別収集が地域力の低下を招くのではないかとの懸念もある。排出困難者対策が必要であるという現実がある一方で、地域力の低下を招く要因にもなるおそれがあることから、地域力を低下させずに排出困難者対策を行えるような仕組みや工夫を十分に検討してほしい。

○ホームヘルプサービスとの連携

- ・高齢や障害などにより、円滑にごみ出しができないケースがある。中でも、介護保険サービス（生活支援・訪問介護）や障害福祉サービスを利用している世帯では、ホームヘルプサービスの時間帯とごみ出しの時間帯が合わず、ごみの適正排出に支障が生じている。

○急病やケガでごみ出しできない時

- ・単身世帯で、身体に障害がある場合や、病気やケガにより体力が低下している場合に、どのようにすれば安全にごみ出しができるのかが課題となっている。

3. 排出機会の確保～拠点回収や収集回数拡充について～

課題（審議会の意見）

○排出困難者に関する課題

- ・生活時間のごみ出し時間と合わない、仕事の都合でごみ出しができないなどの理由により、地域の集積所を利用できないケースがある。
- ・自治会に入っていない、地域との関わりが希薄、不燃ごみ排出時にごみから生活状況を推測されるなどのプライバシーに対する懸念など、様々な理由により集積所を利用しなくなっているケースもある。
- ・紙おむつ専用袋を利用する世帯は、乳児や高齢者を抱える世帯であり、こうした世帯への支援施策であるにもかかわらず、配布場所が限定されており利便性に欠ける。

○ペットボトル、プラスチック製包装類に関する課題

- ・ペットボトルの単独分別収集やプラスチック製包装類の分別収集を実施すると資源ごみ量が増え、収集日が月1回では少なく、家庭に多量の資源物を保管するスペースが確保できないおそれや、衛生上の問題が懸念される。また、収集日には地域の不燃ごみ集積所に収まらない可能性もある。
- ・収集回数や排出機会が少ないため、多くの市民が直接搬入することにより補っている。
- ・資源ごみの収集回数が月に1回と他市と比較して少ないことがリサイクル率の低下と関係している可能性がある。古紙やプラスチック製包装類は各家庭からの発生量が多いため、週2回の可燃ごみの日に出されてしまうと、リサイクルにつながらない。
- ・収集回数を増やすということも検討してはどうか。そうすれば直接搬入も少なくなる。
- ・地域事情によっては収集回数を増やす必要が無い場合もある。

4. 地域コミュニティの維持・活性化について

課題（審議会の意見）

○自治会間での情報共有の方法や機会が必要

- ・自治会での工夫、シルバー人材センターへの外部委託や問題解決の手法など、他の自治会の様々な取り組みを共有すれば自治会の負担軽減になるため、情報共有の方法や機会が必要。

○行政との情報交換、行政からの情報発信

- ・地域課題を出し合ったり、行政の施策を発信するなど、地域住民と行政が情報交換できる場所や機会が大切。

○「ごみ」や「環境」への取り組みを通じて培われた地域の力をどのように維持・活性化するか

- ・高齢化やライフスタイルの変化により、立ち番などの地域活動の維持が困難になりつつある一方で、長年にわたって地域が連携して「イヤなこと」に取り組み、これまでに培われたコミュニティの力を今後も維持・継続するため、「ごみ」「環境」の側面からどのような取り組みが可能であるか考える必要がある。
- ・ごみの問題は、老若男女、障害のある人、地域の繋がりを大切にしたいと思っている人も、そうでない人も、すべての人に共通している問題なので、ごみ問題に取り組む中で地域の問題についても働きかけていくことができればよいと思う。
- ・ごみ問題は地域づくりのツールになり得る。
- ・古紙の行政回収をせず集団回収を中心としている市が多い中で、舞鶴市は行政回収を手厚くすることで地域力が弱まっているようにも思う。集団回収を増やすことで、コミュニティの力を高める工夫が必要だと思う。
- ・リユース活動やリサイクル活動を地域の新しい繋がりのきっかけになる活動と組み合わせる工夫があればよいと思う。例えば、防災訓練と合わせて実施したり、様々な団体と連携協力してリサイクルやリユースの活動が活発になれば良いと思う。また、そこに市の助成があれば尚更良い。

○コミュニティの多様化、地域の力の維持・活性化に向けた仕組みづくり

- ・集合住宅居住者や新興住宅地と旧村が分離し、関係性や連携が希薄化している。
- ・今までなら地域で助け合うことで成り立ってきたものが、助け合うことができなくなり、それを民間や公共の各種有償サービスで補うことができるようになったことで、地域力の低下を招いているという側面もあるのではないか。
- ・大変なことをしたくないから地域から遠ざかる人も増えている。
- ・助け合いの風土や共助が弱くなっている。自助 7 割、共助 2 割、公助 1 割と言われるが、共助の 2 割も弱まってきている。

- 多くの人住んでいる地域での繋がりを大切にしているが、一方で、職場や個人的な関係に重きを置き、住んでいる地域との繋がりを重視していない人もいます。コミュニティの役割を考える際には、地縁組織だけでなく、こうした目的型のコミュニティを重視する人たちにどのように働きかけるかについても考える必要があるのではないかと。